

■ 戦略経営研究会 122nd ミーティング 議事録

日 時：2018年6月2日(土) 14:00-17:00

場 所：東京/竹橋「ちよだプラットフォームスクウェア」

テーマ：平和構築外交のマネジメント ～南スーダンの現場で学んだこと～

発表者：紀谷昌彦さん（外務省中東アフリカ局アフリカ部・国際協力局参事官、  
前駐南スーダン大使）

参加者：12人

（ヘルスケア IT ベンチャー、金融経済アナリスト、ビジネス研修講師、会社経営、  
会社員、NPO 法人理事長、税理士、行政書士、司法書士等）

目 次：

1. 外交とは？
  - ① 外務省での30年
  - ② 外交の課題。
  - ③ 大使の仕事
2. オールジャパンを構築する
3. 南スーダンと対話する
4. 国際パートナーと協力する
5. おわりに

発 表：

外交の中で、付加価値をいかに生み出すかを考えています。外交にはいろいろなアクターがいます。大使として赴任した南スーダンは厳しい勤務・生活環境にありました。赴任当初は、ホテルに仮住まいの単身・合宿・自炊生活でした。本日は、南スーダンの現場を通して学んだ、①オールジャパンを構築すること、②南スーダンと対話すること、③国際パートナーと協力することについてお話ししたいと思います。国益の実現は、持続可能であることが大切です。自国の国益のみを追求し、周りに迷惑をかける外交は長続きしません。逆に、国益の実現とともに世界を幸せにする外交は歓迎されます。外交を通じて、日本の「伸びしろ」を現実化できればと思っています。

1. 外交とは？

① 外務省での30年

国連担当課から始まり、英国のケンブリッジ大学へ留学、ナイジェリア勤務を経て、防衛庁（当時）に出向しました。外務省に戻って、マクロ経済等を担当し、在米日本大使館の開発問題担当（世界銀行や USAID など）、在バングラデシュ日本大使館勤務（開発援助の「実験場」。

マイクロファイナンスも目の当たりにしました)、PKO 担当室長、国連総会・事務総長担当課長(国連総会議長の広島・長崎訪問に同行しました)、防衛省に再度出向(地方協力局配属で、安全保障と国民生活の調整)、在ベルギー日本大使館にて NATO 担当(ウクライナ問題でロシアに制裁が課された頃。日欧の安全保障協力が課題)をしてきました。開発援助と PKO の経験を持って、南スーダン大使に任命されました。任期の前半は大きな事案には直面しませんでした。後半は、ジュバ衝突と邦人国外退避、自衛隊部隊への新任務付与、国連安全保障理事会の制裁決議をめぐる議論や、自衛隊部隊の南スーダンからの撤収など息つく間もありませんでした。

## ② 外交の課題。

外交の目的は平和と繁栄に加え、価値もあります。日本人の価値観と関係なく、平和と繁栄があればそれだけで良いのでしょうか。外交においては価値の問題が難しいと思います。外交は、特に明治維新以降の歴史を踏まえ、長い目で見ないと判断を誤ります。また、外交は大きなボールをみんなで追っているところがあります。各々がどこかを触りながらボールが進んでいきます。また、国ごとの重みがあります。日本は大きな国であることを理解してふるまう必要があります。自分のことばかり考えている大きな国は反発を受けます。日本がどんな行動をとれば、世界は良くなるのか。これを考え、行動することが求められます。日本の国益のための行動も必要ですが、日本の強みを活かして、世界に貢献する行動も必要です。短期的な利益を得ようとする立ち回りもあり得ますが、日本を存続させるためには、世界の信頼を勝ち得ていかななくてはなりません。

## ③ 大使の仕事

厳しい国での大使の仕事は情熱と体力のあるときに務めることができ、とても勉強になりました。赴任国の日本人コミュニティ、現地人社会いずれからも、あの大使は恥ずかしい、けしからんとならないように振る舞わなければなりません。引くべきときと、出ていくときの判断を正しくしなくてはなりません。そして、失敗したときには責任を取る役職でもあります。他国の大使ともやり取りを行い、首脳との会談にも同席します。首相官邸への意見具申も行います。遠方の紛争国、途上国であっても、そこでの出来事は日本に影響を及ぼし得るのです。

## 2. オールジャパンを構築する

2011年、南スーダンはスーダンから独立しました。しかし、政府と反政府勢力の間で対立や衝突が起きました。政府に問題はあっても、政府を批判して交代させれば問題が解決するわけではありません。その中で、日本はどうか課題になります。

南スーダンでは、日本のさまざまなアクターが活躍しました。自衛隊、JICA、国際機関、NGO、そして大使館です。研究者やメディアも大事です。アクターのそれぞれ思いを共有し総動員するのが、大使の仕事です。とはいえ、現場での連携は難しい作業です。それぞれに本国の本部に対するアカウントビリティがあります。そこで、現地のアクターをまとめてチームを

つくり、共同で取組のパッケージを作りました。みんなが集まって何かを行うには、知恵が要ります。そして、たいまつを掲げることも必要です。また、自助努力のための支援が日本の特徴です。単なるお恵みでは足りず、救われた後に、自分たちで生きていく必要があるからです。そこで、有機的に社会の発展を考えていくことになります。

### 3. 南スーダンと対話する

南スーダンは国内の民族同士に相互不信があります。その中で、この生まれたばかりの国をなんとかしてもらいする必要があります。まずは、心ある人の声に耳を傾けました。私自身、日本という平和で豊かな国でのうのうと生きていて良いのかという思いがありました。しかし、ナイジェリアで勤務した際には、現地の人々が援助資金をもらっても、それが汚職に回り、状況が良くなることもあると感じました。そうならないためには、良いリーダーを支える制度をつくる必要があります。支援対象国に良いリーダーとなる人を見付け、それを支えます。さらに、そのリーダーや後進の人達が活躍できる制度を構築することを支援します。途上国支援は、その国の良い政策、良い方針を支え、真摯な姿勢でその国に向き合う態度が大切です。

### 4. 国際パートナーと協力する

まずは知り合うことです。自分の組織だけで十分対応できると考えがちですが、どこで何がどうつながるかわかりません。会合があれば、顔を出します。そこから、課題解決のための認識を共有して対立を回避します。とはいえ、それぞれ本国の思惑は異なります。ひざ詰めの談判も必要になります。衝突をする前に、話しを付けるのが外交です。日本の支援金額は米国の1/10ぐらいですが、日本は信用されています。この信用を基盤に、日本の支援金の効果をスケールアップしていくことが大事です。オーナーシップを重視し、支援対象国と一緒に行動します。地方公共財政管理支援、献血制度支援など、ODAを有効に活用してきました。

### 5. おわりに

日本の強み、万人が認める日本の価値は何でしょうか？ 日本の歴史とか、日本の現場にしかないものとか、日本の強みとなる価値の源泉は日本自身の中にあるものです。これを深掘りすべきではないでしょうか。例えば、バングラデシュの場合も、自国で開発・普及したシンプルな技術や制度は世界に横展開ができます。それぞれの国の独自の価値をいかにスケールアップするかが大事です。現場から世界を変えていくべきではないでしょうか。一人では何もできませんが、一人が始めないと始まらず、その意味で一人の可能性は無限大です。また、「オールジャパン」は大切です。しかし、この言葉はジャパン以外を排除するかもしれないという若干の課題があります。そこで、「オールジャパン」から、例えば「Global Design with Japan」と発展させても良いかもしれません。

以上